

編集 後記

新緑がまぶしい時期になりました。年度初めの慌ただしさも落ち着き、2025年度が本格稼働してきた頃かと存じます。

今月号は原著1本、資料4本です。研究の対象で見ますと、小児がん、医療介護施設、0歳の多胎児を養育する父親、産婦、若年性認知症者の家族介護者と多様な対象です。研究デザインで見ますと、全国公的データを用いた研究2件、質的研究1件、文献レビュー1件となっており、公衆衛生領域の研究の多様性を感じる構成になっております。

原著は、全国がん登録データに基づく小児がんの受療動態と死亡率を検討した論文で、小児がん患者の多くは居住地内で受療する実態を示しました。また、移動負担での比較で全がんや一部の診断群で差異があり、小児がんや治療の集約化が進む日本の小児がん医療体制において、患者の移動負担に注目する重要性を示唆しています。

資料では、まず、医療・介護施設におけるヘルスプロモーション活動の実態と施設の種類による活動内容、促進・阻害要因などの知見が丁寧に整理されています。次に、国民生活基礎調査に基づき、日本における0歳多胎児の父親における心身の健康状態と生活実態を示し、多胎児の父親に必要な支援課題を示す貴重な知見です。3つ目は、日本国内で実施された産婦の抑うつや不安を軽減する支援方法とその効果を丁寧にレビューされた内容で、産後ケアを検討する上で重要かつ即戦力になる資料にまとめられております。最後に、若年性認知症者の家族介護者が診断後初期に支援を求める際の心情に関する研究で、支援を求める際の切実な願い、葛藤、診断の過程で抱く負の感情を緩和したい思いなどが、ありありと示されており質的研究で示す意義を感じます。いずれの論文も、より良い公衆衛生活動づくりに役立つエッセンスがたくさん詰まっており読みごたえがあります。

読者の皆様におかれましても、日々の活動の中で公衆衛生上重要だと思ふ知見がありましたら、ぜひ本誌へ投稿いただき、エビデンスをご共有下さるとうれしく思います。また第84回日本公衆衛生学会総会で演題を出される皆様におかれましては、発表準備を機会にぜひ本誌に投稿いただけると幸いです。(月野木ルミ)

次号予告 (第72巻・第6号)

原 著

認知症初期集中支援チームの活用実態と活用促進の検討：支援チームの併設有と併設無の比較から…………… 児崎友美
保健師の事業化・施策化能力の向上に活かす事業実装力の関連要因：都道府県および保健所設置市調査…………… 下田和美、他
健康関心度尺度の短縮版作成…………… 山田卓也、他

特別報告

屋内ラドン対策に関する提言：建築物衛生と疾病予防の観点から…………… 山口一郎、他